

『吉本ばななイエローページ』（荒地出版社、1999年7月）

文学部教授 木 股 知 史

公刊する作品が次々とミリオンセラーを記録するという華々しいデビューを飾った吉本ばななは、当初は、少女マンガなどのサブカルチャーとのかかわりや、破格の文体といった表層の視点から語られることが多かった。また、その平明な物語については、通俗的な反復と見なされがちだった。だが、その平明な物語には、哲学的といってもよい問いが含まれている。そのことを、なんとか、言葉にしてみたいと思ったのが、本書の執筆を引き受けた動機である。謎本のような軽いスタイルで、ばなな文学のシンプルな深さを明確にとらえたいと考えた。対象が現代作家であっても、過去の作家であっても、批評や研究には徹底性が必要とされる。この仕事のために、大宅壮一文庫に依頼した資料のコピー代金は十万円になったし、徹底して関連資料にあたった。でも、何よりむずかしかったのは、平明なものの中にある深さをとらえるという作業であった。思いのほか難渋することになったが、批評する側にとってはやりがいのある仕事になった。

「キッチン」の続編として書かれた「満月」という作品には、「本当のひとり」という印象的な言葉が使われている。この言葉は、人とのつながりがあっても、個としての孤独の意識が消え去ることはないという文脈に現れるが、社会や共同体に属している個ではなく、そこから切断された個の意識を肯定的に志向しているように感じられる。「キッチン」には、家族をすべて失った孤独なヒロインが登場するが、単なる通俗的な悲劇を描いているのではない。ワンルームで一人になるのではなく、本来家族の場所である台所で一人になるというアイロニカルな設定は、与えられた自然の家族をゼロにして、そのゼロの地点から人と人との関係を模索するというモチーフを示している。自然な家族のつながりが失われることは、個や家族をゼロの地点から再編成することの意味を問う前提として描かれている。つまり、少し抽象的な言い方をしてみるならば、社会システムから与えられた成熟のプログラムをいったんゼロにしない限り、私たちは「本当のひとり」になることはできないというメッセージが、「キッチン」という物語には含まれているのである。

長編「アムリタ」では、頭を強打したため記憶を生きたものとして感じることはできなくなった主人公の状態は「半分死んでいる」と形容されている。この「半分死んでいる」という状態は、実は今の社会で普通に生きることの暗喩となっている。私たちが、生きるということを考えるとき、たいていすでに現実を受け容れていることが前提となっている。現実を受け容れることが、心の一部の死を意味しているなら、私たちは、「半分死んでいる」ことになる。吉本ばななの文学は、現実や日常を受け容れて生きるということが本当はどういうことなのか、ゼロの地点から考え直そうとする。彼女の物語は、繊細な優しさの奥に本質的な問いを隠しているのである。

本書を仕上げて感じることは、吉本ばななは、現代の心の危機を象徴する平明な物語を書くことのできる重要な作家だということである。身近の若い人たちがふと明るさのなかに深い憂いを感じさせることがあるが、吉本ばななの物語はその憂いの根拠をうまく言い当てているように思う。本文は私が単独で執筆したが、本書は、学生たちと対話しながら考えた、教室から生まれた本でもある。